

三井のリフォーム住生活研究所 所長 西田 恭子

知覧武家屋敷群を訪ねて

昨年三月二日に九州新幹線が開通した。車両(新八〇〇系)の窓はカーテンではなく木製のロールスクリーン。窓下テーブル・ラゲッジラックも木製でエコデザインを随所に生かし、座席は伝統織りの布地が特長の車両に、ぜひ一度乗りたいと思っていた。

九州方面の講演会やシンポジウムが続ぎ、その機会を利用して知覧武家屋敷群の見学を目的に九州新幹線に飛び乗った。

鹿児島は西郷隆盛・小松帯刀を始め、女性にとって天璋院篤姫ゆかりの地として関心が高い。乗ったタクシーは島津タクシーで、運転手の方からも「お殿様」や「西郷さん」のお話をたくさん聞いた。銅像や維新ふるさと館も魅力的だが、今回は薩摩半島の南にある「薩摩の小京都」といわれる知覧に向かった。

徳川幕府の一国一城の方針により、薩摩藩は鶴丸城を内城とし、外城を領内に一一三造ることで防衛の役割を果たしたのだが、その中の一つが知覧だった。確かに小道はそこかしこで鋭角に曲がり、視界が効きに

くいようになっている。驚くほどの静かなたずまいの家々と、低い石垣とその上に設けられた垣根に挟まれた小路は「重要伝統的建造物群保存地区」に選定され、風致地区として広範囲に保存されている。何だか時代を越えた武家社会に降り立った気分になるほどで、日本の道一〇〇選にも顕彰されている。

庭園が素晴らしいのだが、私は武家屋敷の建物が気になる。知覧型二ツ家は主屋と付属屋(「おもて」と「なかえ」)をつなげて、そこに小さな棟を付けている家らしい、知覧独特の民家である。二つの屋根の間的小棟が作り出す造形は美しいのだが、引かかるのは、その家には立派な「おとこ玄関」と小さな「おんな玄関」があり、その差は厳格に使い分けられ、決して女性がおとこ玄関から上がる事はなかったという。家のそんなところにこだわっている私に、男性の同行者は不思議がっていた。

また知覧といえば昭和二〇年に本土最南端の陸軍特攻基地として、二〇歳前後の若い隊員達が出撃した地



㊦おとこ玄関、㊦おんな玄関

だ。知覧基地を主軸として沖繩戦で特攻戦死された一〇三六名の隊員の方々の慰霊の為に建てられた、知覧特攻平和記念館もすぐ近くにある。帰る事のない出撃前後の心中を綴った家族への手紙は立派な文面で、中でも「お母さん！」と書かれているものがなんと多い事か。日本のやさしい母が、すでに亡き息子の手紙を手にしてどんなに涙したことだろう。隊員達が最後に寝泊りした兵舎は、半地下壕の三角屋根で居住スペースは小さい。板の間に薄い寝具が並んでいる一人一畳ほどのこが、明日の出撃を迎える場所だと思うと胸が詰まった。

九州新幹線が開通したこともあり、ぜひ一度、訪れてみてはいかがだろうか。



西田恭子氏のプロフィール「一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手かけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。文化女子大学非常勤講師。日本女子大学住居学科卒。